

定本聊齋志異卷四

定本聊齋志異卷



昭和三十年十月十五日 初版印刷
昭和三十年十月十日 初版發行

定價九百五十拾圓

譯者 柴田天馬

發行者 秋山修道

印刷者 中内佐光

發行所 株式會社 修道社

東京都中央区日本橋小舟町二丁目四番地
電話茅場町(66)一七三四、二〇六四番
振替口座(東京)六一六九一番

落丁、靚丁のものはお取替へいたします。

印刷所・鈴木製本

目次

惠 地 乾 大 林 夢 巧 負 酒 龍 尸 庫 鳳

四

芳 震 石 蝸 娘 別 娘 尸 狂 肉 變 官 仙

.....												
六五	六三	六二	六二	五四	五二	三六	三五	二五	二四	一九	一七	三

[illegible]

七二
八二
八四
八五
八八
一〇三
一〇四
一〇八
一一
一一〇
一一一
一一三
一二五
一二六
一二八
一五三

沂水秀才		一五
江中		一五
蕭七		一六
禽俠		一六
呂無病		一七
陝右某公		一八
五穀大夫		一八
雲翠仙		一九
張貢士		一九
褚遂良		二〇
龍		二〇
龍二		二〇
龍三		二〇
石清虛		二〇
岳神		二五
柝樓人		二六

人妖	長亭	汾州狐	豢蛇	宦娘	某甲	張老相公	衢州三怪	車夫	武技	張誠	霍生	捉狐射鬼	楊疤眼	田子成	三朝元老
二八二	二六九	二六七	二六四	二五四	二五三	二五一	二五〇	二四九	二四三	二三三	二三〇	二二七	二二六	二二九	二二七

5

扉・挿畫 福田 貂太郎

定
本
聊^{れう}
齋^{さい}
志^し
異^い
卷
四

鳳仙

劉赤水は平安の人であつた。少い時から穎秀で、十五で縣立の庠に入つたが、父母が早く亡つたので、遂う游蕩にふけて學問を廢してしまつた。家は不中實ではあつたが、性好修飾で、衾褥なぞ皆な美なものであつた。一夕、人に招かれて飲みにゆき、酒が數行かしてから、燭を滅すのを忘れて出てきたことを憶ひ出し、急いで返つてくると、室の中で小語が聞えるのであつた。變だと思つて窺いて見ると、一人の少年が麗い人と榻の上に眠て居るのである。劉の家は廢はてた貴族の第に臨つてゐて、恒う怪異ことが多かつたから、さては狐だなとおもつて、少しも恐れず、つと中に入つて、

「臥榻に鼾睡は豈容」

と叱りつけた。すると二人は惶遽て衣を抱へ、赤身のまゝで逃げ去つた。そのあとに紫の統の袴が遺ちて居て、帶上に鍼袋が繋んであつた。劉は大そう悦んで、竊まれるのを恐れ、衾の中に入れて抱へて居た。俄、蓬頭した一人の婢が門の罅から入つて來て、劉に向ひ、袴を索取といふのであつた。劉が笑ひながら賠償を要めると、婢は酒を遣ませうといつた。應しなかつた。金を贈ませうといつたが、又り應しなかつた。婢は笑つて出ていつたが、旋に反つてきて、

「大の姑さまが言やいました。もし還して賜れば、佳い繻を報に致しませうつて」

劉が、

「伊誰です」

ときくと、婢は曰つた、

「吾家は皮といふ姓で、大の姑さまの小字は八仙……共に臥つてらつしやいましたのが胡郎です。

二の姑さまは水仙といつて、富川の丁官人に適つてらつしやいます。三ばんめの姑さまは鳳仙といつて兩姑に較べると尤お美しく、不當意ことはありません」

劉は失信れるのを恐れ、好い音を坐待てゐようといふと、婢は去てしまつたが、久してから復た返つて來て、

「大の姑さまから官人へ寄語でした。好い事は猝に合るものではありません。適ま言して方遭詬罵たところですが、但、緩時日に待つていらつしやいませ。吾家は輕諾寡信ぢやありませんからつて」

で、劉は袴を付してやつたが、數日か過ぎても渺に信息が無かつた。ある薄暮、外から歸つて來て、門を閉めて坐ると、雙の扉が自然と啓いて、二人の女が被で女郎を承け、四角を手捉て入つて來た。そして、

「新人を送て至りました」

と曰つて笑ひながら榻の上に置いて去つてしまつた。近よつて視ると、まだ醒めないと見えて酩酊して居るのである。酒の氣が猶だ芳ばしく匂つてゐて、赭い顔、酔つた態、傾絶人寰あでやかさである。劉

は喜び極まつて捉足解襪せ抱體緩美めてやつた。すると女は微し醒めたと見え、眼を開けて劉を見た。そして驚きに四肢も不能自主、但だ、

「八仙の淫婢が我を賣つたのね」

と曰つて恨むのであつた。劉が狎抱ると、女は劉の膚氷のを嫌り、微笑して、

「今夕は何たる夕だらう。こんな涼人に見えるとは」

と曰つた。劉は、

「子兮子兮、此の涼人を如何するの？」

といつて、遂に二人は相歡愛になつたのである。

やがて、鳳仙は、

「婢子無恥！ 自分が人の牀癡を玷して、よくもあたしを椅の換りにしたのね。どうでも少し報をしなくつちや！」

といつたが、それからは至ない夕とは醒く、甚殷く綢繆い二人であつた。あるとき女は袖の中から一枚の金の釧を出して、

「此は八仙物よ」

といつて劉にわたしたが、又數日か經つと、繡の履を懷に入れてきた。それは珠入の錦繡で、工巧殊絶めたものだつた。女はそれをみんなに暴揚てくれと囑むので、劉は親や賓に誇示かした。すると觀に來る者たちは賞や酒を贅にもつて來た。由之、劉は奇貨が手に入つたとおもつて、それを預つ

て置いたのである。するとある夜女が来て、忽に別語を作た。劉が怪におもつて譯を問くと、女は答へた、

「姉が屢のことから妾を恨み、遠方へ携家去て、我たちの好を隔絶うとするのよ」

劉は懼して屢を還さうといつた。

「不 必! 彼方は此でもつて妾を挾らせようとして居るんですから、もし之を還せば、中其機つてしまひますわ」

劉は問いた、

「何ぞ獨りで留らないんだ?」

「お父さまもお母さまも遠方へ去つてゐて、一家十餘口は俱な胡郎の經紀に託せてあるんです。だから若し従いて去なければ、長舌いあの婦が、黑白を造へるだらうと恐するのよ」

それから復う來なくなつた。

二年蹠つた。劉が鳳仙を念ふことは裏切なるものであつた。偶、送で、女郎が款段に騎り、老僕に輕をとらして行くのに遇つた。女郎は摩肩つて通り過ぎたが、ふり反へつて障紗を啓き、こつちを相窺たのを見ると、艶絶い丰容であつた。頃すると一人の少年が後面からきたので、

「あの女は何者です。頗う佳麗のやうですが」

と極贊ると、少年は拱手をして、笑ひながら曰つた、

「太過獎て。あれは山荆なんです」

劉が惶愧不安おもひで謝過ると、少年はいった、

「此何妨さ。南陽の三葛の中で、君が龍を得たので、區々者は何足道です」

劉が少年の言葉を疑がると、少年は曰つた、

「君の臥榻にこつそり眠てゐた人が君には不認んか」

劉は始めて少年の胡であることを悟り、僚壻の誼を敘べたり、嘲諷をいつたりして、歡しく話した。

少年は曰つた、

「岳が新歸つて來たので、僕は一省觀にいかうとしてゐるところです。君も同行きませんか」

劉は喜んで胡に従ひ、榮りくねつた山に入つた。山の上には、故と邑人の避難した宅があつたが、女は馬から降りると、その中に入つていつた。しばらくすると數人が出て來て、二人をながめ、

「劉官人もお來になりました」

と曰ふのであつた。二人は門を入つて翁媼に逢つたが、自分たちより先に又一人少年が來て居た。

その轉や袍は炫い程美であつた。翁は、

「此が富川の丁といふ壻どのです」

と紹介した。並は揖をして座に即いたが、少時すると酒炙が紛綸ならんで談笑が頗洽む。と、翁が、

「今日は三人の壻どのが並な臨てくれて佳い集りと稱ふものだ。又他人は居らんのかやから、兒輩も喚んで一團之會しよう」

と曰ふと、俄、姉妹が俱に出て來た。翁は席を設けさせ、各々臂の傍に坐らしたのである。八仙は劉を見て口を掩つて笑ふ。鳳仙は與嘲弄ふ。水仙は貌こそ少し亞ちるが、沈重溫克した質で、滿座が傾談であるなかに、一人酒を把つて含笑んでゐる而已であつた。於是て履舄交錯れ、蘭麝の匂ひ人を薰じて、楽しく酒を飲むのであつた。劉は牀の頭に樂器が畢備つてゐるのを見て、玉笛を取つて翁の壽を祝ひたいといふと、翁は喜んで、善るものは各々一藝を執れといひつけた。で、合座の人々は爭つて樂器を取つた。惟だ丁と鳳仙とだけが取らなかつたのである。すると八仙が、

「丁郎が請えていらつしやらないといふのは可けれども、汝のは指を屈けて伸ばさないやうなもんだよ」

と曰つて拍板を鳳仙の懷に擲げてやつた。便と鳳仙が拍板を鳴らして繁響の串を取つた。翁は悦んで、

「家人の樂み極まされりだ。兒ども輩は俱な歌も舞も能るのに、何うして各々所長を進さんのぢや」と曰つた。すると、八仙が起つて水仙を捉へ、

「鳳仙はもとから金玉其音だから不敢相勞わ。あたしたち兩人で洛妃の曲を歌はうよ」

といつて二人で歌舞つた。それが方ど巳だとき、婢が金の盤に果物をのせて持つて來た。みんなに果物が何といふ名か知らなかつた。すると翁が、

「これは眞臘の國から持つて來た、所謂る田婆羅といふものぢや」と曰つて數枚を掬つて丁の前に送つた。鳳仙は不悅おもつて、